

鏡なす我が見し君を阿婆あばの野の花橘なつめの玉たまに拾ひろひつ

作者未詳

『万葉集』卷七「挽歌」冒頭に置かれた歌。「大切な鏡の

ようにいつも私が見ていたあなたなのに、そのあなたを、阿婆の野の花橘の玉と見て拾いました。「阿婆の野」という場所がどこにあるのかはわかっていないが、夫を亡くし火葬した骨を拾う悲しみを嘆く作である。

橘の白い花を玉のようにして緒に通した首飾り。愛する人の骨を美しく儂い装飾具に見立てることで、悲しみを自らの身体に引き寄せる深い痛みが表現されている。(自分を映す)鏡のように、(身に付ける)橘の花の玉のように、と呪術的なモチーフの比喩を重ねているのも挽歌にはめずらしく、耽美な哀感が漂う。

秋津野あきつのを人の懸かくれれば朝撒あさきし君が思おもはえて嘆なげきはやまず

秋津野に朝居ある雲の失せゆけば昨日も今日もなき人

思ほゆ

冒頭の作に続く二首。「秋津野という土地の名を人が口にする、あの朝撒いたあなたのことか思われて、私の溜息はやむことがない。「秋津野に朝方からかかっている雲がだんだんと消えて行くにつけて、昨日も今日も亡くなった人のことが偲ばれてならない」。一首目、二首目では「君」と呼んでいた夫を三首目では「なき人」と呼び変えている点に、死を受け入れる心の経過が切なく思われる。

死者を拾うこと。死者を撒くこと。薄れてゆく雲に火葬の煙を連想すること。いずれも土葬の時代にはなかった表現だろう。生きていた頃の姿のまま葬るのは、生と死とが繋がっているという思想に基づくものである。日本に仏教の死生観が持ち込まれたことで、魂は肉体に宿るのではなく、死後は新しい肉体へ輪廻転生するという新しい思想が広まっていったのだ。

亡き人を悼む心の姿は今も昔も変わらない。けれど、時代の変化に伴って悼む言葉の姿は変遷してゆく。

(小島なお)